共古日錄

四十九

特別
15
1413
51

共古日録

四十九

特
門 15
號 1413
卷 51

共古日錄 四十九

早稻田大學圖書館
昭和 25.10.24
購 求

猪は此物無数三期以前より有りて今に至れる動物にて十年
以前よりあり子を持つ最多数にて七十足余に立すとぞ
猪の子鉾を祝ふも子の多きをよろこぶ為なり猪は進
むを知りて退くを知らず勇者の意を得たる動物なり
子が聖書に「鋤に手をつけて後を省みる者は我に与ふ
らずとの聖言によりて
鋤につけて後をみるなとの四数示す其の年は来つ
猪は猪を向きたり抱かえり見るをのむ果ぬ動物ゆゑ
形点をもつぶ首が曲らぬとて冨を求める人に嫌はるべき
毛物なり
其は元来毛物の猪にはあらぬことにて黄二帝の化といひ伝
律書に其者該也二陽氣藏於下故該也とあり又釈名

其形石

には其核也收藏百物核取其好惡真偽也亦言物成皆
堅核也と律書の説によれば動物にあらず生男より起
り説も漢代以前よりありと思はる然し元来起りとするもの
は十二年の如き星座説より出しことにあらずや
明治四十四年辛亥一月廿四日伊勢参宮を
して五十鈴川にて下関の如き自然石
其形あるを採取し年にも因あれば
墓を自然にて右に在けり八十年志
発其になれば其を記す序に図す
石出し関の
如し石色青
黒猪形白色

金銀富貴の守

金銀富貴の守といふ四守りを今至の日八十姫殿砲陣の端
前にとりあり包紙の内に封したるものあり影の如くにせし枯葉
の様なり何分見分難く湯にかれて見しに銀杏のあき皮なり
外のハ恩多の花なり此花金銀花の異名あれば金銀はこれなるも
富貴ハ何かと思ひよく見るに蒸薑の皮なりこれを金銀富貴と
知しことあり故多田御愛氏に活せしに舊ぬは八十姫の名こそ
ふよりおせしがまゝ金柑の皮がかりしと活されたりし
大正十年の冬至ニ四谷須賀神社にて金銀富貴の守りをおせり
これは第分に惠方に向けて柱に張り置けとのみ封の内ニハ大小
にあるの方を記し小紙片に福如東海金銀富貴壽如南山の三つの
厭勝鈔を印せしをかれあり又高田完八幡神社ありしのハ前と同様
の様なれど内ニハ銀杏と金柑を一粒つゝ包み二包ニハ一陽来復と呈せしあり

剛拔卯杖

剛拔卯の起りに就て問はれければそれを説明す為に諸
書に載すものを参考にまゝ集む
日本書記 三十持統序 三年正月乙卯日二 大学寮献杖八十枚
類聚國史 六十歳時 天長七年正月己卯四日 天皇御紫宸殿
皇太子献御杖
文德實錄 仁壽二年正月己卯二十日諸衛府献剛卯杖逐
精魅也 これは漢土の風俗の傳りにて漢書 九十九 王莽 正月
剛卯金刀之利皆不得行、服虔曰剛卯以正月卯日作
佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用桃著革
帶佩之 と此風俗の傳りしなり
中家實錄 二 正月上卯大学寮就本省經宮内卿献御
杖長五尺三寸宛切之為二三束結若干束献之杖之

頭形五行獸形祝之徐精魁

建武年中行事略解　卯の日まあくれが卯杖の墓あり二府奉る　此も所生氣の獸のすがたを作りて卯杖をお負す様々のつくり也有り　堂盤所に奉る中宮春宮御猶忌　年もかへりぬ十五日に人々こゝかしこに集居つゝおかしけなる糊杖引かくしてかくみにうかゝひ又おたれしと用意したるすまひかもはくども、おのくおかしく見ぬ　祝菓子　十五日の糊の木ひきかくして家のこたち女房などうかゝうをおたれしと用意して常にはなちを心づかひしけるゝ云云

又同書云　四文あけさせ給へれば尋ずかりなる卯杖ふたつをうづ丸のさまにかしらつゝみなとして山たちずなひかけ山まげなどうつくしけにかざりて四文はなしたゞなるやうあるんやはとてのうんまれば　うづちのかしらつゝみたるもひさきかみに「山とよむとのひきをたづぬれば　いはひのつ丸のおとにぞありける」

古今集　物の部　云く　二條の后春宮のみやす所と申しける時まめどくまけづり　花させけるをよませ給ひける　文屋やすひて花の木にあらざらめども　咲きにけり　しこのみなるとてもかな

めどは妻ラ有り　花の木にあらざらめども　前花の檜にて作り檜は花さかぬ木の方かく云のなり

支木杖　卯日　承徳二年正月庚申夜歌合　讀人もらす

色かへぬときはの葉の玉椿君が八千代の卯つ丸にそまふ

みやのうちむつきはかみの卯の日とて　雲元二年六帖題　民部卿為家

みかま木に卯杖とりそへけふこそは君が　文永九年毎月一首中　杖は以前代のため　同　春いそくらめ

けふみやのうちには年のもしめとて　同八年毎日一首中　雪井の庭にうつ丸たつなり

倭訓栞　けづりぎな　古今集ヨリ見ゆ　けづりかけこる
作り花也　新千載集ニ佛名の菊花といふ　延喜式
御佛名侍ニ菊削花二枚と見えたり　就續古今集
ニ云元の山ニかゝらきて削花さゝける持るにかゝらきのかゝ
ニ女宮花を作りこりけるとも見へたり　（僧都親教　草も
木も佛になるといふなれとをみなへしこそこゝろかられけれ
倭訓栞　卯杖とまけり　正月二卯日桃梅椿柳など
いて杖を作り五色の糸にて巻きて大やけに奉る
木工權頭為忠朝臣　百首
ひかけ草花の色にもまぎもて初卯の杖をいまひつけつる
いかにして日かけの糸をとりそへて千年の卯杖たて初まけん
樅陰廣談ニ　客問曰北越兒輩毎到年正月十者

新作木杖名曰削杖以笞新婦為歳首祝然無知
其義者是祝何事耶答求生男子之祝其詞曰大
男十三人削杖亦云糊杖云云
年中風俗考　火の子　火ノ子トハ義也陰相ヲ作り
テ童ノモテアソビトシテ女ヲ祝シテ火ノヲノコ子ヲ持チタマヘト
云フ義也
都名所圖會　毎歳陰陽の子刻より神事ハ五の刻
まゐり法務執行腰輿にのり社司前駆して社參し執行ハ
師殿に拜し神前に黙座する事少時あり經咒を誦し
天下安全を祈る東西の橘の内ヨリ削杖の木を先
右ニ建て置きおのゝ六毛これ即十二月の數に比
同時に是を燎し其烟の靡き向ふ方を見て今年

卯槌とふもの木槌の形にはあらべ打つ棒より打ものなる
ゆえ槌とふ言葉を借り来りしなりと思はる
鵜杖杖の先に鵜をつけ女なに戯れしとの説を為す
老あり迄卯杖を用ゐるゆゑ新き箒を製したるより
鵜箒又はおかいかきこのかきものとなり名称となりしと
思はる

甲斐のおかいかきと称するもの
削掛削花等も卯杖の削りたる花の如くなりしより
花として飾りしこともあり始め杖の如く長くありしも
次第短く現物の削掛のことくになりしこと思へり
泣行せし如く始ハ漢土の剛卯の風俗本卯ニ傳り剛卯杖
となり卯杖卯槌鵜杖鵜箒削掛削花等の
起りを為せしこと考へ

雛祭の起
元と雛人形

大宝三年三月の雛を賣る見世近年殊に多くなりしは頼み
物屋まで店頭に陳列したる淘器又ハ土燒の雛は名称を
改せしものなり故法の晴風翁のうれ為の友に図さ
れしよりいろくの雛を横造せし者多くなりしなり
元来ゐるの起元に就ては二説あり一は上巳のはらひの
人形より起りしと一ハ幸神祭より起りしとの説なり
今ハ桑枝略況の幸神のことあれど雛の起りとは思はれず
雛祭は秡の人形よりゐるなる遂の玩具と混交して
今の雛祭となりしと思へり
男女秡の人形より紙ゐるなるもて甲府の花しき雛の
菓のゐるな静岩の天神ゐるなるの類草狗の人形の起り
こと思へり男女一對の雛人形室町ゐる寛永の以も雛顔

大正七年四月下總佐原町にて雛人形を賣り居るに出逢
人形の量及二寸を越し女がかいどりを被し人形ありしを需求め
今手に持ちたり 其他嫁造りの外は古風のもの更になし
先年静岡にて張子製の赤塗りの雛一對を需求しことあり
其數東京にては見かけず
ひなとは 鳥のひなの如くいさくある愛らしきもののゝ名
となりし説あり 契中抄にひいなとき こゝに云ふ鶏 なりとは
嗚呼と云ひていさゝ愛らしきものをさるのひなよりいへるとの
説 延喜式に見ゆと云
雛に供する食物は さゞえの如き貝類に蕉暦三月三日は潮干の異名
あるゆゑなれば 供物にもの供する也 菱餅の云ひし形の説を云ひつら
ずいはれるか豆煎すらあられ餅など 多くの異説ありて遍せずなり

奉公人出代り

菜の花雛

桃の花もさし供を飾り雛人形を陳列し少女の楽しむ様は
昔ゆかしき菜の花をしての楽しみけるが今のは東京のの名か
何やらもの足らぬ如に感ぜり 三年三月三日に
坂戸の嗚呼の代りには三月四日は奉公人出代り時まで下女奉公
のよく出替りの頃めあるしありしにゆくもあひて年中行事の
一つなりし 此日雛人形に比して遊ぶものゝ多く醜女でありては
あやしをそしらんと云ふ 御馳走にも何の雛も出来るは
という鳥 食すらと「あさつき鱠」で おさらば」
と云ふことばありし 今はさるものもなかりし
菜の花雛とて女の子は菜の花を頸とし葉を衣服として
摘み好む菜か楊枝などをさしとめて菜の花の花も翫びては
遊ぶこれは蕉暦の頃なればこそかゝる遊びも出来て楽し
かりしなり 昔は又菜畑伝は何れの家にてもありしことなれし

三月の下り風

三月の下り風といふ諺ありて風あげを好む者は火風を
あげる二月の富士の風にあげる者多かりしも三月の月になると
皆々好む者もあげることなくウナリの音をきかぬ始なるなり
これを三月のさかりだことといふ

婢の持てる櫃

下女は衣服を多く持ち居る者も箪笥を主人に好き見えて
はなさぬことにて櫃と称する 圖の如く下に引出しあり
上部にかふせ蓋ありて左右に鉄の環ありこれを負ひて男が
持ちあるものにて今は東京にて見られぬ道具なり
川柳に下がる乳母亭主にこゝ櫃をしよむ

奉公人出替り日の祈りし事

奉公人出替りの日明暦の大火迄は二月の二日なりしと此
大火の時三月廿日に出代りすべき由の命令ありて廿
日となれりと東都歳事記に載す（四月廿日に出代り）

芝栗山蔵書の所生

芝栗山の蔵書 狗波仙の蔵に悔せりこれ等の書籍
に雀林萬巻楼に納むとの文意なる印章を捺あり
と雀林なる所は深川十万坪の地といふ人あり 狗波仙
にてもあるや詳なぐすと思ひ與道記の説なり

庚申塔に就て

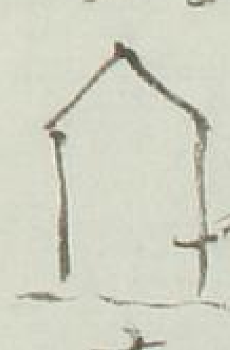
庚申に関する事はこれ三猿塔なる一冊に記し先にたるゆえに
精しくいたさず 板碑にあるは文明二長享二大永 文亀二等
あり（江戸時代の塔には）寛永 正保 慶安 天和 貞享元 元祿 宝永 正徳 享保 多きは元
祿宝永の年號あるものなり 右碑面及塔に記しある文字は
庚申尊、青面金剛、庚申天、庚申待 供養、二世安楽
諸願成就、等の文字あり 又繪には庚申尊の像、猿足 鞘を持
てる猿、桃の実を持てる二足の猿 三猿、鶏、上部左右に日月、
地蔵尊と三猿、馬頭観音と庚申尊 六字名号と三猿、上部に梵

漢碑の形式

霽の殿と書てある箱

頭が蠟梨にある

かあるもの等あり菜畑庚申塚の碑には文永二年の銘ありしが
折れし由を埋め今の碑を建てしとの説あり
漢代の碑 蹟(圭形也)は亀まで碑の上部に龍ある如く書多
しこれより唐以後多く此形なり漢代には



圭形多し
と碑本朴生にいふ
春慶塗の其の蓋の箱を見る表に霽殿御殿召上り物
御用書付箱とあり裏に天保十年卯七月にて唐筆露部
とあり箱の内に書に鶴亭とあり箱の内底に鶴とあり
彩の所には何を[illegible]と前はれしが[illegible]見ずく
奥田頼杖の心の種(道)の活三年がよるに頭が蠟梨にあるとあり蠟
梨とは梨の事にてもと前はれしがこれをもらす頭が
閑なることをかと思ひしに蠟梨なるをもらす堅き梨果ならんか

世継稲荷再建年月

海北友雪の額

保養文成の払ひ歌短冊

数字を読む歌

飯田町の世継稲荷の社殿は文化十癸酉九月再建
吉川式部の時再建せられしといふ
海北友雪は道暉友雪と号す友松の男なり延宝
五年九月没す年八十 遠くに見ゆ町の矢大臣比貴
天保社に額あり牛の図なり 武蔵和田村の内村の先
き大窓に白鷺の杉松にとまり額由井正雪
と[illegible]友雪を濃く[illegible]ものと思ふ
三村氏短冊会にて豊女のかほちやの狂歌短冊を見られしと
優五図を撰へこれ優なり墨の題にてよみしなり
目には見えて手にはとられぬ床の中のうつちの憎さのみすぞありける
数字にてを引ねて歌とせしもの
二四八万二、一八五九、三千十四、一百八七三九、三千三四八、三三三

廢娼説の最初の人

廢娼説は公にされしは津田眞道氏にて明治八年明六雜誌に出されしを始とす同十年は藤新平氏廢娼説をおされしことあり同十三年萬國聯合會より我政府に公娼廢止されんことを申込み同年十月イタリヤゼノアに開かる廢娼會(我政府にも度々遣はされんことを望めりかることありしを知る者稀にあれば)

獅子頭の古物

神社祭典に出す獅子頭の古物贊岐國名勝圖會に出す

惠書曰 於大水主社大明神東室所奉安置獅子頭事

文安五年戊辰十月 日

火願主 中村朱門 文堯

次綵色願主 貞時宮笠太夫

細工 宮内重左衛門

文明二年庚辰十月 日 貞時兵衛尉

三位公全秀

閻戸の板碑

文安五年より大正三年迄は四百七十四年迄なり獅子頭の古物なるを見れば此頃よりのものなるべし

閻戸の延原寺といふ寺に元弘三年の板碑ありて文中に萬金減元に閻する文ありと深田氏聞かれて話されしがもらす

深川の名称の起り其他

深川の地は府内備考に慶長の頃豊州の人深川八郎右衛門此処に来り新開せしまゝ其氏を以て地名とす

十萬坪は平井六萬坪の北裝江の堂に道郭を為す地を千田長兵衛の開きし地なり

三叟とは成蔵、新法、靈岩嶋の三方より水の流れわかる

三叟ゆえ三俣と中と江戸崔にあり

閻羽の像ある海蔵寺といふ寺深川萬年町二丁目にありと

江戸の茶園の始り

江戸にて茶ものの流り

記されし書あれど現存あるやをしらず
江戸茶園の始は寛永十五年江戸の南北麻布と大塚の
海形に開かれ地田下の海家これを司どれり麻布田の嬬
児輪等の変の由なりしが石川と物場を始ると云山貞徳ごとき
二代将軍よりの茶畑起り称茶高等を生ず
元孫享保に芍茶寛政に橘文化に奴負文政天保に茶年青
以葉蔔石斛安政に梅草等流り明治なりて
茶テンとさしまゐりせるが茶年青石解の如き高價に
ぜしもの等一時の流りなり
茶蔔又流りせり蔔翁これが為に居る世藝家なり
享保三年に江戸蔔会あり大輪共すのものなりとす
享和二年向島茶ばなり事なし

江戸に於ける飲食年中行事

文化十二年始めほ流りし茶蔔なりて奴負百四十種をなせしと
同年蔔人形を巣鴨姉木屋にて作るこれが蔔人形の始
なるらんか

江戸飲食年中行事
正月元日朝雑煮餅芋に始菜を入れる屠蘇元日は
茶を入れぬものとて福茶を飲む福茶とて茶に黒豆と昆布
を入れしもの　二日三日元日と同じ
七日七草糊とて餅に青菜なづなを入れしもの
十一日鏡開とて御備餅を切り汁粉を作る
御せちとなし　三月の粧理ゆゑ牛房焼豆腐里芋胡
蘿蔔田作等を煮メ置きて菜とす
なます　とて大根にんじんを細引き田作を入れ塩まてもみ

酢をかけしを食ふ

十五日 小豆粥

若餅 こは必ずつくといふことは無けれど筑ゝ後につくをいふ

二月 初午 稲荷の祭に各家とも稲荷の小祠あれば者飯

由揚 鱗を供す 又菜と或刻のむき身をみれかしは味噌

刻したるを食す

八日 お車汁とて小豆いも午房いんじん其他何んなと

みれし汁を食す 十月九日も同じ

六月 彼岸 會ま當るゆえ如はぎ又は閑事を懸す 秋も同じ

三月 三日 雛祭 豆ゆり 草餅 拾 さゞ豆 白酒

四月 八日 閑事いたゞきとて教蓮花の如き形に作るあり 甘茶

こは飲む為ゝはあらねどる供ハ好んで飲む者あり

五月 五日 柏餅 粽 菖蒲酒 こは菖蒲の根元の皆ゝ家をゆりて二

三斤 糖口まみれ酒をつぎ飲む

六月 嘉定食とて餅を十六まれ食す者あり一般なるぞ

七月 用の丑の日うなぎを食すこれも一般ではなし

七月 七夕祭 そうめんを食す 生霊食 道の飯を供ず

八月 十五夜 月見 閑事 牧豆 法華

九月 九日 菊の花を酒まみれ飲む一般ゝはなさず

十三夜 月見 閑事 牧豆 牧のまゝの以も（きぬかつぎとそうふ）

栗柿等を供じて食す

十月 亥子 牡丹餅 浅漬大根 漬菜

十一月 冬至 とうなすを食すこも一般ゝはあらず

十二月 晦日 そば 月毎そばを食する者もあり

有卦ニ入る年の人ハ七色のふの字つくたる菓子を食す事也
蓬、葉、舟、福包、福卵、二股大根、笛、等の形したる菓子を
食す
季節に関する食物を語るせば
春ハこはぐの酢し　川川白酒　芋の田楽　くろ山の車ざし
筍めし　嫁菜のしたしもの　つみ草もの　木芽田楽
茅　白玉　汁粉　冷水　麦湯　冷むき　魚肉洗い
鮎　果物　いも類　きのこ類　茄子の略焼
参　[illegible]　大福もち　獣肉類　焼芋　湯類
凡呂字大根の如き重ニ日ニ湯至腐と同姑至好よる
料理なり

かつら子の図

九月ねかつら子の図　元ねなる草を以て女子の作るもの

土雛

後の雛とて九月ねかつら子の
祭りしことありといへども
絶て無し
古きり柳に
村の嫁今ニアのでくで雛祭り
田舎にては今ニア焼の土雛を
用ひたりとの意なるが今ニアでこれなるを

今ニアこれなとふものあらは
こんなもの子と思ふてゑがく

共右

又考ふるに
今ニアひな
なるもの多
分享保雛
に寄しもの
なるに然らが
長敷なるに

燒き所しせもらす又今ア雛といふものを見ず骨董
集まも田舎へ今ア云なのあることを記されたれば燒はし
ことありと見ゆ

天明の狐言ニ
フラソコの極意

天明四年の狐言菅蛙集に
初云那も立や弥生化二日三日化こつけてハ逆もぶらそこ
この下の句ハ云ふフラソコはビイドロの徳利まで白酒を入れ
ることなりと見へ美しあれば雛道具まは必要の
ものなり

南會津辺の
まいくの童謡

福島縣南會津郡辺まいくの童謡
だいろ（蝸牛）角出せ（女）にしも出せは（我）ねれも出す
右同此ニ人宮井平成氏ヨリ

久地の姉妹

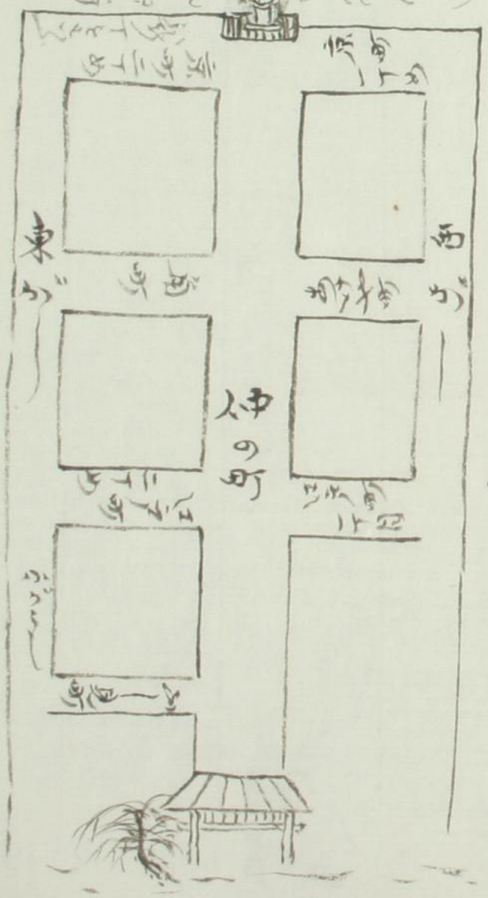
大正十二年三月廿六日久地の姉見んと渋谷の停車場へ入口に
徳氏と會す三村村長川豊井木村生田ゆと七名玉川電車
にて二子鶴点出る車す十九成玉川辺まで茶屋多くあり
鮎の料理の看板かゝ玉川に面ふてこ座敷見ゆ其事まゝよる
遊場なる様茶まゝ綿製狸と鮎との狸が鮎をぶらさげたる
如き玩具を賣り所れの足をたゝ浴衣の裏へ歩みたく
にこ留前の大雨まで所覚し所のつゝ所ようハ所ろ也
所れが所迄ハ所中を歩ずねばならぬ足袋をぬる所中
三間歩み形へ少對岸も所たかくあらんかと思ひしに向ふ
は徒渡せず一回足をふきさを思ひて歩みたり
徒渡りはめたさ思ふ姉の足
足をぬらしたゝかゝ渡成は取らぬ渡場なりまより

き盛土のうちに枯朽たる三丈程の株あり所なり
西妻森林の樹も枯れ又れ所あはれを示すのみ
鉄壽如の茶杓尼天の仏佛あり縄文土器の金形なるもの
あり所林の裏の古墳よりもとの説あれと予は信ぜず
他所より持ちしものと思へり其他野路の如きは
人のよくもる靈宝なれど古きものはいあらず一種の縁起
に添へ靈宝のものあり山縣大成の撰文の碑ありしめ字詰
を更に磨し讀み難し大略これ等を見て
行歳次辛丑定一日あり雛堂を饗せられ此江翁の語其
他二三の話ありて其所にて翁は七十七歳とす
藝好の老人まで非常に喜び居られしと予は大にこれ
[illegible]

郭里のいろは
好錄

天保九年戊寅春七月二日多聞多人共中本三冊歌
川國直画の郭里のいろはと題せるあり昔京遊女
の買ふ直頭其他客なるものの心得を記せる俗書なるを
今となりては風俗多きにもあれば三田村
魚氏の蔵書を借り一覧して摘に其要を記し置く

江戸町二丁京町一丁め
角町この四町を大町と
いふて小見世ばかりにて客理に
客を引揚ることなし
京町二丁目を新町
といふ大かく二朱なれど
末にいたりては銭見せも
変りさらになるも引過ぶ
なれば四百文ごろ夜と



コテ一軒 鰐馬初家 藏眞筆梶原書 日高
後草御門外六百年来此住居

元祿の恩鹿子ハ二軒家名は異なり昌屋の那創業か
不明なることなり成家の鰐馬屋の娶るが現今中興町に住す
る鰐馬屋の今の當主の父ときく 古川柳に 觀音につゞきこれなど鰐馬やいひ
國寶になり鰐馬四枚京の青の者ありと其中は最近なり
寛永の年號ある住の倉 弘の間なりとて
南嶽貴稱一ノ七ニ園記とて書に建暦年中伊豆の三島の社へ
八幡太郎の遺事の軍の間あり又太宗記の阿保と秋山との
阿原軍の間あり其以来仏美殊に手合として拙なることあり
三島は此古鰐馬ありしことを聞かず古く書くなりしことか
天狗草紙に東寺山門に鰐馬拙し間あり これ等古き鰐馬の証

お宝になる鰐馬

古書所載の鰐馬

楊弓一面大愛刻拙

文政七甲申春 古板の中本三冊 岡心鳥の著せし 楊弓一面大愛
刻と題し 画工英泉の鰐ありあり 當時楊弓場女と
客の姐子風俗等 今とあらはれ 多巻にはなるものなし
三田村鳥魚氏の夜本を借り 安を拙
むかしは客の来るをまちて居たりしとおしゆえ
にゆかしといひなりけり女をまちて居るとしてこれより起りし
なるべし今は殆らず張りかけてもちゆえ楊弓を引き行くといふ
なり 若古按するに此説器手張るは別するにて遊女が見世を張る幕を
張るなどの言葉の如く男が女の前にたらなり女を引くより出
にて娼妓の張るまゝより起りしこと葉なるべし
手場女の風俗を記して
もつるが古立海さぼりの中に右に大きくつるを紺に染むしたる湯かる
恵をりは鄉鹿子のちりめん不尚の方を恵をおりかしせうも鰐の
しんのうちき帯をメかゝ前だれ麻のせんさい茶に花びしをとこらく
まつけ紐の葉ちりめんを巾廣のしぼ かしらはぐやまがらくあるひ

おひやる、福祿屋喜平とふ腹ッふくれ、
ゐる麗屋サ――年こそよつたれ　口子の元祖、
ぞうの柏子木カツチ　この柏子木に帰らまやなふ
燒とうふとハ　ハテ　まやんさしてゐるだらう、
腹から燒へ　なきもうのがこ山京提灯をあす、
お忌殊　まつくれ、
ヤアイとう　命んぎく、
麦湯を呑まぬこのサ、
いまさかうぎ巻、鹿子餅、求肥、紅梅、麻芽餅、南京様、
和山巻、うき雪鐵鉢、さぬき巻、葛もちらぎまんぢら、
等もちがしの中にあるあさぢもち南京様等ハ今あるを示す
兄の良工ハ貴玉、鳥、菊也、正林、増田、近友、初代の銘ハ一知なとを最上とす
後に風竹秋と云へり近代の銘ハ一知是も良工後に松花
とせり

矢まつまづ鈴木舎壽三輪久利同正利近藤忠重なんぞサ
今ぞハ鈴木宣勝だね　忠恒もよしいつてこせらるが
の鞘をぐつとしぢつて木つまをましてたした度がイヤモウ
女でいそふなる二ヶ川姿といつたよふナものサ　まゐ丸もんだ
其句の二ヶ川ハ深川姿といふことをまぢかり二ヶ川といひ也
もし見んたる事ハ　さるかもなしぢかうダがこんな一本なると
一本なりしサ　羽がゆれとう　羽がきれなんだりも　命りふこ
命りふまぢか
前のちのつきにて矢ハ目方一様て無けれバけぬ矢場ハ嘉
なことなとんじやく無きぬをかるものを用ぬと思ひぬを
年まむまさはるといふんるのなりかくらふとなの人がへりふみ
命りふまぢかと変のせかえせるハ當時両屋の興ま吾の縁を

踊りつゝ歩みゆくのと踊ぬ始て踊るのとあるこれをへり
ゑんだりこゝろと云へるよりぬくこゝろ
原三位頼政ハ称らひもなくして怪鳥を射る唯精神の盈にして真暗闇
から遊ぶ所望ゆゑ勢名武将のいさおしこれハそれとハ小同
大異雀ハ弓ハ称らひが男一ゆてまなせばあやまくぞ
弓五の的の錐をも射る拳ゆゑ少し狂ふとき尊乃的
も外てドン左手で上手に射る小娘も習ふよりはなれ
業勇でゆる射手連中頭ハ猿の類ぶる襟てどうさう
居る客ハ腰に虎の皮の胴乱を持ちたりうかゝまれ
矢箱の数ゆゑ矢とまの女の口なハ升してモウ射ぬ年
太といひさぬ之下略
こは作者の序文なり文句中の錐とは的の真中に穴あり矢本
史ゆゑ穴なり聞く上方の錐ハ三本位大穴と悪口かむらず

エテ名物の飲食物

ハテ名物と称するものの十の九迄は飲食物にて其他
のものも一分まで足らぬ程なり其ゆゑ元来ハテは
上業の他ははあらず諸国の人々入込来りて国へ出産
としてハ持行くものハ此茅屋茅か錦繪其他ハ草を
数寄まてありしエテ砂子ハ石三生として塩
瀬饅頭丸ハ軽焼米饅頭数世餅田忽焼其他多く
の名ハ言ふまで勤せなり元禄茅の買物調方三合無覚ニ
飲食店に勤す多数なり其外文政七年のハテ買物調
方記ハ多くのすぐれハ故清水晴風の編せしハテ名物
部数ハ多数ハ飲食物ハ名物と称せられ
記されし名物と称せられ野菜類を記さんがこれを
純ハテの三生出産て少なし先づ其重なるものを挙

れば
駒込茄子　茄子は種火にて焼き皮の色殊よく
味もよく富士浦の土産に買求られしより名を知られし
けて巣鴨辺の農家の作りしものなり駒込に青物市場
ありしより一層名ゆくなりしも
三河島の菜　青物にしてハ汁地のもの莖の味甘美にして
千住辺のハ苦味をかゞ莖の元迄葉のつる所ノ漬物にしてハ
第一の香物なり
煉馬大根　青こなく大く味ひよく尾州の事大根に同し
といはれど香物にしてハ老年も佳味なり
君概葱　こゝろよく白根長く葉甘味にて関東第一の
ものとす君概の地　葱牛房等に通す

小松菜　葛西小松川辺の畑よりとゝのと知事数者に
つゝ無くてハならぬ青味にして葉やわらかにして味佳なり
各ハ小松といひ青色もよく春めける物菜にして志ぬと
し花姫魚をかける所若ハ最よりこゝ青なりと思ふ
内藤新宿八度の番椒　火久保辺一帯の畑色づく時に
見事なるもの所たらがらしハ度火をくなく葉も漬て食す
に佳なり
成子瓜　こは真象瓜の名ゆ地なりし　楽村の地なり
目黒の筍　やはらかく甘味地に適し至る佳なり
谷中の生薑　筍なく見るからくなく味佳なり
早稲田の茗荷　大くやはかにて佳なり今ハ地名に為す
のみとなれり　茗荷畑　茗荷坂　茗荷谷等何れも地名

玉川の鮎
鮎鮨 辺の鯊
深川の蛤
成美川 紫鯉
ひとつ 鯵
芝魚
以上は江戸名物の中にてれられたあり
速和歌後拾載集 真葉瓜
まくハ瓜とあ瓜とひとつさらにもりこと見ゆりて
四方志こい
妙好の忘るしの瓜となるこ瓜ともにもらさぬ 真葉瓜 七中
日本 志葉瓜
よいこねとこんとまくハの瓜つくるこうね花さき実のなる子村彦

狂歌才蔵集に 大根 原部 行澄
何友と畑の中にてゆけむ心ふとき糸のねりま 大根
醉 竹集 茗鯵 橋 沙
一寸の鮎まも あらの玉川やちりうく花の皮すきやうな
茅 載集 七夕瓜 橋 沙
いつの世にふたつの星となるこ瓜うまきなるこ此名にはこちらん

江戸の富士山

古川柳に「駒辺は一富士二鷹三茄子び」
この一は駒辺の富士山なり二は巣鴨の鷹匠細屋なり三は前の狂歌
にも云へる茄子を云ふまでよくミツを絶し心をしたる妙なる
が見ゆ此しなり又「駒辺の富士は二三も一所」 前も前と同じ
江戸の富士二合目から横に切れ
浅草の富士も板穴一つあり

大ごまり

爲さ山のみなりび山へ出てゝ山のまゝる精神上に感化を
与へるものにて相似大ごへまゝる者の言はらりしそよく
これを示すものなり川柳に
問ふに落ちず石屋で懺悔する
懺悔く間男を殺しました
さんげく いゝ男であそびました
さんげく大黒を盗みました
さんげく借金をしました
どうしたかゝ山帰りしける人のよさ

彼等の垢離取に唱ふる文句は「サンゲ〳〵ニコンザイショウヤウ、オシメ
ニハツダイ大山大聖不動明王石尊大權現大天狗小天狗」といふこ
ニ稲田障をニコンザイショウヤウとひ大峰八大をオシメニハツダイと誤り云ふ

年の市大黒盗み

前の大山まゝの川柳に「さん帰り大黒を盗みました」
とあるあり年の市に賣り居る大黒天を盗みてこれを
祭れば好運ありとの俗信まで市に大黒を盗むことあり
これをいふ川柳亦多くあり
四人體にもと大黒取り戻し
暮の市毎年盗むりちぎもの
大黒は盗んで罰にならぬもの
盗難に大あなもちの命あひ
盗人に祝へと市戻り
大黒を盗み一目散に逃げ
かまずに楯に彼の大黒をねらひ
市に徳をふんまへた物目ぎ

大黒を手長ゑかう買ひに来る
徳のついでに鯛までぬすまれる
大黒の外を目がける太いやつ
大黒はそれからごろんじやりませう
車を好むやうなもの大黒賣
見つかつて所大黒はいくらだの
春の買ゆだと講りかうなだめ
忘びすさま人たかへけて盗まれる
市がつりかんまかぎやらをそつと出
正直のとくは大黒斗り盗み
盗みついでにかこまもと心がけ
賣の盗みは大黒に目はかけず

大黒はいつがあつりこ手がわるし
大黒を盗んで手桶置て来る
大黒の都宮は鍛の出たのなり
市のあとやもめ忽比寿が三ツ出来
盗人に捨られて居る忽比寿

右の外いくらもあることならんが盗み取りて祭り置が翌年
は奴運であるとの運信から高人の目を暗せしことなりし
これらまで大山の川姉よく解し得る

筍の原産地

同黒の筍のことを以テ久地の中に江るせしが孟宗所の
原主生地は支那にて琉球に倣はす薩摩に倣りしを幕府
の国書の用達をなせし平塚村宇戸越の山路に郎兵衛
勝考とこれ人薩摩より所を取り寄せ栽培したる

青柳綿といへる今ハ遠くて此ニ三方辺より来る事して
木綿織とす今一番多く青柳にて製造するものハ南傘
にて中以下のかさを[illegible]
箱根が崎は夏喬麦の名立佳地にて村山一帯の地も同様なり
川のこゝろと雲のりかそくえらなるべと村山及箱
根が沢の原種は盛岡種といふ青森辺弘前辺のそば
殊に佳なりと成田氏にきく
胡蘿蔔 其井辺の地のもの佳なりといふ
文化二年の江戸名物往来といふ書に前に沢せし胡茉数の
中に出辺の茄子をあやしが名物往来まハ駒辺の中見茄子と
してあり平びたる形にて形ちよこゝハ覚えたるかぬ茄子と
覚へたるかぬくあり

江戸時代
銭に関せ
ものの其他
銭の名を以
て称せしもの

江戸時代面貨に銭を使用せし時に銭に関する物品名称
等を思ひこゝろを記し
銭箱 高人の見世大いに関せず使用せしもの開きたる銭
受口へ投込み学を開き見世に向ひて戻ることが小僧の為
すべきことゝ雲を者ハ指の間銭を挟み私するゆえあり開き
私を云ふを云ふ事といふ
銭筑 高人たり銭を家にあるを為ゆえ手元に音を用を辨す
ざるの筵今ある紙ぐ籠の如くして短くいさなるもの
銭壷 これハ東海道辺にてハ古く用ひしとそハ中泉の
舊家にて見たり用ハぜにざるに同じ
銭ぜし 此らにて縄の如くあみ止を結び銭を貫ふこと
とす長さ八寸程 九十六文をさす

竹筒の銭ノ　大き竹の三四尺位なるを上より節を
ぬき柱へ抜き生きて賣りし銭を入る多く小賣高人燒
いも食なるとありたり年代なく時代を示す以ろ面白を
用者まてよく見抜しことあり
銭車　一文銭の穿へ大き棒をさし猫柴の如くして
木綿こゝろをからませ銭を廻すとこゝろを引きなし
糸とするものにて女の子はかくして糸を繋し球りの
かゝりとせるものなり
施しの一文銭差　所家見世先へ施を乞ふ乞食ハ一
手持する労をさける為め細長き板へ二行に釘をかち
まれ一々一文ツを差し二十なり三十なり列くなし乞
乞食来りて一文ツ板を取て礼をなして持ち去る一文一人に与ふ

ことまて板の成なくなれば又明るのことなせり
銭占は面背の板なす数ほとり吉凶を判断すれ
に銭占の書籍あれば別に記せず元禄七年出板の
馬銭うらなひ又銭占晴明秘密袖鑑等あり
文銭鋲　数居へ打つけ置く家あり多く見世の取る所
なり咒なれどいろくのことこゝろ客の多く来るとかゝ又
聞きもの這入らぬとか詳なりす
文銭の指輪　文銭を以て指輪になせ中風にかからぬ
とて造らす志あり其奇なり
中風の出ぬ咒に文銭の指輪を持めてよろしくなれ
共波銭を求めて下帯を買ひて入れば腰下の痛なと
共波銭の鑄ゆれある咒へ赤きこさぬ糸を通し子供の

幕末の為首と東京府の為首

四文でござります、「十八文にさつしやい、「口明ぢやまけてあげようといふ所へ、とちりからもおてきて、くらにめしましたといひながら、庇をポンとひれば、いもうり「モシこれ旦那、あるきちいの邪魔を被成ますな

此笑話まある二十四文より本當の價ならん一年三十文ハ安永以後の相場と思はる

幕末以後羽織袴も筒袖細袴と変り行く世の様をなげきて信ぜず飯田の家老某の詠し哥ニ

世の中を思へハこそ細袴涙ぬくもん袖だまもなし

と詠しと飯田の人羽生永明氏ニ云く

或人東京府をよみしとて岡本昆名氏ニ云くに

東京府中宮をとれば豆腐まじぼ罪見れバからぼかなり

為首の職りものなり

日本橋の名称

ロシア日本橋なる名称の起りに就て諸説あり其一慶長見聞集に此橋慶長八年創架にして日本國中の人聚り住なるにより此名ありと其二ハ市府内備考に諸國行程此より起るを以て名くと其三には ロシア名所圖會の説にて旭日東海を出るを望むを以て称すと其四ハ墨水消夏錄に何國の人を問はずばシアに来るもの皆此橋を過るを以て名くと其五は此元来細流ありて橋といふ程のものも無く二本の木材を架せしより二本橋と呼しが橋も改り文字も改りしなりと其六に日本橋の称大阪に古くよりしより ロシア幕府起り名称を改めのと同くせものと此新しの説ハ大阪のハ何年に創架されしかまれにて

松浦の納られし廿五鏡の天満宮

決することなり 管子の諸説中にハ二本橋を可とするなり 第二説よりあれど里程を定し前橋架ありしと思ふ 第五説をとる者なり

故松浦武四郎北海翁が北野天満宮を始として廿五ヶ所の天満宮へ日本國全圖を鑄出せし大鏡を獻納されしことありたり 古へ加藤清正が日本全圖を鑄出されし大鏡を北野天神へ奉納されし 此鏡ひ北海道を加へ寄附者の名を鑄出せしものなりし廿五出来ひしか否やうかいもらす 左の如き順まで

管公一代記による由

一 西京鳥丸管原院 管公生誕地

二 〃 錫天神

松浦武四郎 景部東化

三 〃 管大臣 紅梅殿建られたる処

四 〃 吉祥院

五 〃 長岡

六 大和長谷興喜山

七 〃 吉野大成院

八 河内土師里

九 〃 法太山

十 摂津大阪天満

十一 露

十二 福嶌

十三 尼崎長谷

十四 須磨綱敷

山中信天翁

○

山本

松浦

松浦

遠春堂

皖紗

風月堂

市川萬庵

○

大古

風月堂

十五 〃 磐休
十六 播州 曽根
十七 〃 大塩 畢山
十八 讃岐 瀧宮
十九 備后 尾道 赤袖
廿 安藝 宮崎 連歌屋
廿一 周防 宮市 松浦
廿二 筑前 鳴多 網場
廿三 大 宰府
廿四 播州 高橋 土師
廿五 城刀 北野

松浦
松浦
○
柏原學而
松浦
三田
松浦
松浦
八野湖山
○
山田義七

以上予 松浦翁より聞ゝ手帳に記し書を載す 明治十二年ひか

松浦翁の中達子

これも明治十二年の頃と思ふが靜岡の柏原學而氏が書室を造られしに松浦武四郎氏が来圖され同氏に居されしは家に華山が鶴と崔とを画ほし 腰障子九尺四枚のものありきれを譲り中さんが如何かとのことゝ故其ひ二京 書用ありしかは柏原氏ハ印を見て来て呉れとの依頼ありしが第る松浦氏といふ度々靜岡へ来られ直しこともあれば手しに速く腰障子を見せられたり松浦翁は二障子の材は山石川西某園にありし火木の枝筑を倒れしを西鶯師（世田とこれは杉鶯也）もらひ受け腰板とし華山に画をかゝらはしものと板目にて又ちは墨塗腰板の表に墨画まて鶏数羽を画あれ裏面まは群雀を画あれしものなりし帰りて柏

蝸牛翁の
遺物を
と思ふ

存せしが都合ありて譲り受はなされざりし無勝
悼
る今何れにあるか
蝸牛翁は一年一度は必ずなされしが之が数は一々持たず至る
迄まで知人の家に寄り[illegible]新潟まで来られし木綿[illegible]服の
古るい置き袖れかに[illegible]見られと中さん黒き老女の[illegible]の如
く勝引てらし天竺木綿の柿色の単衣を持たし管
笠かぶり手提の皮鞄を持たれ大体人が見ると知らぬ者も
海老をさげ[illegible]提がさらの如き物を[illegible]書きたる書籍が
出玉と菓鏡と[illegible]一品との袋を入れられて[illegible]見せられ他
して[illegible]の有志等[illegible]を集め古物の[illegible]をなされし
ことを[illegible]翁の好みを[illegible]果の傘[illegible]長く[illegible]
其葉[illegible]知名の書画と人の[illegible]書あり[illegible]
等は今蝸牛翁の遺族が所持かと思ふ

宗祇法師の
児教訓

児教訓は宗祇法師の作にて群書類従の
物語部（三百五）に収るものにてはあれど其文は若々の
若き者の訓の為に書かれたる教訓にはあらで[illegible]
為せの若者もあり今とはなりて解し難き詞もあれと為
いかに多く[illegible]思はるゝを写しおく

児教訓　　宗祇法師

つらつら惟んみるに　世のなかの　わかき若衆の　[illegible]
するの画中の　徒然さに　大かた是に　書つくる
筆のすさびも　おこがまし　先第一に　かのみちの
そのたしなみは　きらひいて　人にはすねて　いろいろて
人せうして　つきて　おとなのごとく　茶はのみて
人によりそひ　よりかかり　さてもつかしき　ように[illegible]

こがたなかりて　ちりはして　二世事いひて　利口して
朝起はせで　晝霖して　手習ふ事は　いやがりて
戸かべ磨るに　ものかきて　里ずきはして　手はすかで
たゝみ柱に　墨つけて　しら笑して　ほかげにして
人ももちぬぬ　腹たて、　友の為衆と　からかひて
日にいく夜も　つかみあひ　親や妨主の　上いひて
物しかべと　をしへねば　手のあがらぬも　道理やと
我とわがみに　理をつけて　親に違たる　時ばかり
おとなしげなる　ふりをして　かげにてかはる　心こそ
さもつらにく　おもはるれ　かくてはせめて　四五年も
者のすまひを　するならば　少しきらしも　付べきに
三年さへも　くらしかね　ほどなく里へ　引こみて

父母こめて　すいかいに　やらじつかはず　髮ゆはず
手足あらはず　爪きらず　もさくとして　あらし子の
子どもあつめて　くみあひて　足にものはく　事もなく
忌のこ庭とり　追まはし　小鷹見えつ、　四十から
しめ　すゞめ　さいとりを　さすも似合ぬ　火がたな
つかをば長く　こしらへて　火打ぶくろの　緒を見れば
山どりの尾の　しだり尾の　ながしくも　ふりめげて
さげ緒なかより　折かへし　くりかたもとに　巻こめて
すかるのかびを　ゆるくしめ　前へだらりと　さしこぼし
紙こ道服　うちはをり　こびんしろに　とりまはし
さらはさいく　そりもせで　さかやきみれば　夏の緒の
蘆のごとくに　しげらせて　色よきい袖　重ねきて

人の元もんの　なんいひて　世に聞なれぬ　ゑぼし為を
我とさいく　体かへて　人のけんらはの　さやもちて
人ごといひて　身はしらで　過山しける　道にちは
小歌曲年　あとさきの　とあはづあはぬ　うたひをば
しぞろもどろに　うたひなし　きげんよげなる　たかわらひ
よそのみるめも　思はなれ　さて又よそへ　呼ぶ時は
よき折ふしは　出もせで　時ぶらつして　たびくに
度をえても　ひねくりて　たまく愛へ　きてだにも
あれへこれへと　しやうずれど　疊のへりに　はひ付て
手をとり人の　引時は　そばの柱に　しがみつき
立あがらぬも　けしからぬ　やうく座敷に　なをりつゝ
はしをとるより　程もなく　大くつろぎに　くつろひて

あたりの人の　け菜を　こくしんなしに　こひとりて
心のまゝに　魚鳥の　骨かみならし
逆音たかく　くふときは　老若ともに　見ぐるし、
かくて中酒に　ぬりぬれば　すんののびたる　盃に
二つも三つも　酒うけて　中酒すぎての　いひの湯を
けはてうめて　こぶめかし　茶のこいづれの　用捨なく
昆布一切を　そのまゝに　口へおしこみ　かみながら
とはず沿りを　しいだして　物いふ聲は　聞にくし
茶のこみなく　とりくひて　用にもたゝぬ　柿のさね
くるみのかはを　とりあつめ　むかひの人に　なげつけて
かなたこなたへ　なげまはし　おとなしきひと　肴ねれば
ぎしきもいまだ　過ぎるに　人のふ座敷　いべやへも

あやなしに　かし入て　刀ねきざし　ぬきすて、
ごばんが板　枕とし　わけなき口を　たらきつ、
人のかたなを　づばとぬる　きれんきれじの　ぬきして
をのが刀の　ぬきるく　けいづをいふて　刺口して
はたさぬ聲は　おこがほ　それの女ならず　あまつさへ
女おとこの　ぬがたり　皆くちぐに
思ひ入たる　雑談に　我身の立を　わすれはて
きいしげき　たか笑　人にきかせん　用もなし
小色の　なかばより　すでに逃びも　はじまりぬ
ばくちの事は　中くに　ばけのかきりの　事なれば
筆にかくべき　やうもなし　さすが碁將棊　すぐ六は
じんじやうわざの　事なれば　あるひは手をみ　手をみせじ

あるひはいしの　あらそひに　おそろしげなる　こゑをして
ゑじや白山　入まんと　事もかけぬに　誓文し
右つるもらし　雑言し　たがひに腹を　たてべらば
あそびをしても　むやくなり　しやうぎのばんに　むかひては
時のぎやうじやと　いひながら　やがて詞を　つめあひて
きんのてをはり　腹をたて　はやしめかし　からかひて
はんませ人に　つめられて　をは　もんだうす
まけめになりて　何事も　わうてといひて　立せてりぬ
これらはせめて　十二三　十四五ほどの　わか衆達
おさなごころの　有ければ　ゆうす所も　有ぬべし
是にましたる　おとなども　よきいけんをば　いひもせで
けつく色ふく　そやしたて　二人の名衆　すゝめつ、

いさかひさせて　笑こそ
かるおとこの　したてには
刀きつはに　おしまはし
はやにくさに　刹口して
すいにまかせて　右はしり
ちがふさいのめ　あらそひて
てうちくすんに　ねきあげて
是かやくにん　夏のむし
しらけといはぬ　人ぞなる
勝たる時は　まげんよく
とがなきさいを　なげめくり
腰のかたなを　ぬきかけて

かへすぐも　りよぐはひなれ
すごろくばんに　取むかひ
右たてきを　とるよりも
右のさしひき　あらげなく
たかひに心　一六に
てつくともせぬ　くびのほね
はやいさかひを　しさうなる
火に入よりも　あやうきに
かくてばん数　うちかさね
まけたる時は　はちをたて
弓矢八まん　うつまじと
かねはたくと　うつ時は

物ぐるはしく　すさまじや
日も夕陽に　なりゆけば
酒宴の坐にも　なりぬれば
心をかけて　ならはねば
夢にもしらで　うたひをば
へうしはづれに　とくをそく
さらばないしよに　有もせで
きやくしんなしに　人々に
申さん為に　たぶるとて
人のぬをは　むさぼりて
ぶせうのものに　こめられて
忍こなるかたへ　りうんにて

計逸ひども　末になり
盃すへて　坐をつくり
當世はやる　乱舞にも
つゞみたいこを　うつにも
しほがら聲に　たてゐしを
しどろもどろに　うたひなし
人よりことに　めし出て
　　うちとけて
大きかづきに　さしうけて
くかいのぎりは　かけはてゝ
うちへふくれて　どんにして
りひをみしらで　ねはくちに

ふるきゝ小袖の　あつわたを
としにゝあはぬ　わたぼうし
人によりあふ　座敷にて
詞のうちに　ほねまぜて
人はこゝろの　まんまるに
こゝろ言葉の　かどもなく
はつきとしたる　人をこそ
心の中は　夏の日に
水よりも猶　ぬるくして
まなこのかども　見ぐるし、
あけぬられぬと　するまどに
弓まり連歌　兵法に

みゝをさゝへて　うづみきて
まゆの上まで　引かけて
うちとけ　かたるとき
きしれ　をも　きゝわけず
身なりしあはせ　しとやかに
さすが男の　たましねは
おくゆかしくも　思はるれ
てらせて庭に　たまりける
うへのおもては　すさまじや
かくて月日も　秋の門
さすがに能の　つきたきに
心を少し　かけ帯の

もすぶ連歌の　月なみの
今の座敷に　つらなりて
神の下にて　かぞへかね
心にそまぬ　けいこして
連歌はさらに　なりがたし
師匠をよびて　ならふとき
もねはらこしの　つめやうを
是もほどなく　くたびれて
後にはられど　出あはず
春のゆふべの　られがたに
ふつとこゝろに　思ひ出し
柳さくらに　松楓

人数になりて　折くの
十七歳　あるもじを
長く短く　句をつくり
次第くに　くたびれて
弓の誓古を　はじめんと
もしてがつての　たうつくり
昔三日　ならへども
師匠をやがて　句かへし
又ある時は　のどかなる
まりの誓古を　はじめんと
夜晝わかず　そのにはに
四年がうりを　うらへて

花やかならぬ
しぶんたぶんを
あひてに人の
又うちすて、
まりはかしこに
むなしくなりて
小太刀鎌ほこ
その色くに
あるひは手数
ところまだらに
はての一つも
心のとけぬ

しりつまげ
わきまへず
きらひけり
なげすて、
はてにけり
十五字
こしらへて
二つ三つ
つかひなし
覚えずし
ゆへぞかし

身なりあしぶみ
はひそく多く
まりもあがらぬ
にはには草を
わらべ子供に
さてひやう法に
やりなぎなたに
庭昼わかず
あるひはかつ
これもなかばに
鬘の能の
かくて月日を

つめひらき
するほどに
ものぞとて
しげらせて
ふまれつ、
取かり
木がたなを
かためきて
二つ七つ
おすてく
ならざるは
つもりつ、

あまたの子共
身をも家をも
あなあさましや
春は霞に
尾上のさくら
ほどなく着て
雪めづらしく
はしのもとの
日かげを待や
たそがれ時に
庭のたち花
雪しき人の

そだてても
もちさげて
同じくは
たなびかれ
あをやぎの
ゆく春の
あらねども
せうひは
朝がほの
あらねども
うちかほり
うつり香に

たゞうたづらに
賊山がつに
人となりての
その営
家にこころを
夏はかきねの
布をさらすが
夏に入てぞ
露のめぐみも
冬はゆふがほの
むかしの人を
山ほとゝぎす

そだつれば
ことならず
思ひでに
軒の梅
うちはへて
卯の花の
こくなり
ひらきける
あはれなり
はなしろく
思ひ出
一聲は

もの思へとや　すだくらん
はなさく頃の　かきつばた
花のいろ〳〵　さきみちて
萩の上葉を　そよ〳〵と
秋も近しと　しられけり
花におとらぬ　もみち葉の
をくれ先だつ　ためしかや
きつゝなれにし　むしのねも
はたをる虫の　音をたてゝ
聲ふりたつる　すゞむしの
いたくわぶるは　きりぐす
などとふ人の　なかるらん

つゞ色く　雲間より
にごりにしまぬ　蓮葉の
光をかざし　とぶ蛍
かたへすゞしき　風の音
色づく山の　見えわたり
露のしづくは　世中の
うすむらさきの　いなばかま
うちみだれたる　いとすゝき
夏をしのぶや　まつ虫の
ながきよ寒を　我ひとり
ねあはれなる　ゆふぐれを
初雁がねの　ひとつらは

そらだのめなる　ふみとりや
うつろひやすき　しらぎくの
盛なる君も　行末の
草木の上にも　しられたり
つまこふ鹿の　なみだをも
霜雪あられの　さゆる夜の
鳴や子ゑも　こほりはに
あはれをかけて　わかきとき
あひくとして　にくげなく
たとひ心に　あはずとも
たゞ何となく　かぞもなく
うちをきがたく　あらんこそ

さだめなき世の　ならひとや
霜をいたゞく　おきなぐさ
おとろへはつる　ありさまは
月によるく　うそぶきて
袖にやどして　ふゆはまた
閨のこがらし　聞あかし
なみに浮ねの　をしかもめ
心すなほに　じんじやうに
人のいひよる　折ふしは
もらさぬやうに　あひしらひ
かきとめたる　水ぐきの
見るにかたちも　ますべけれ

此ことはりは　友な人の　とりぐにある　事なれど
心のみづの　あさしと　かるあつめたる　もしほぐさ
よそのみるめも　はづかしきかな

右見教訓　以右四章本校合

以上宗祇法師の化まで前にいふ如く當時の世俗の婦をもたる
に足る故の今文を當す文句中に文字只なると見へ原文白紙に
なしなるとこそのまゝにす宗祇は文亀二年七月晦日八十二
歳まで丞根湯本の逆旅に病死す其墓駿の桃園に
たりとぞ　猿土門院の御宇藤國の人氣少年の風俗
中ゝも此文ことよりよく見てこそを得る

蜘蛛のたるは待人来るの兆

古今集巻二十の歌ゝまそとほり姫のひとりゐて二帝を
系なりて
我せこゝらへきよひなりさかまのくものふるまひ兼て知しも
衣通郎姫は允恭帝の妃なれば今より一千五百年余も古き
歌なるが當時蜘蛛の系をたれることは待人の来るしるしと
婦女まゝ信ぜられしよりかゝる歌よまれしことなるが年代
下りて永久四年の法河次郎百首に
ちるゝとをみるそこれしはたかるれくる人ほくはまちとおもへを歌仲
待かれ者もはやいなるんよひまてこんくものふまひ　仲實
以下同意の詠あれど略す
衣通郎姫の時代よりは数百年後の歌ゝまもくものいとの下るは
待人の来るを信ぜし事の其年代を通して迷信され
しことありしにより詠まれしことを見ゆ

漁嵐響谷豊山待霜、
晨發深省暮送斜陽、
官家惠鳴□術之良、
上下壽無量、

桂飄天竺月落蕭相、
時候不解樂事未央、
威驗除病福里祥八絃、

寛文六年堂宇大破修繕されし天和元年二月音羽護國寺建立の為め取拂まれ常の菓園に合併されしが世百年後に麻布の飯造営せる也として君上られ正徳三年三月限り山石川白山の飯跡に引ゆる當時麻布の菓園の預役たり芥川山姫寺と騎員たる岡田利左衛門に奉行として二百徳賜りて菓人の守ることなり芥川は二萬二千廿八坪岡田は二萬千六百四十坪を預り合計四萬四千八百坪が菓園の地なりしこれが今の山石川植物園の略史である也（前にの鐘今何れまかねしあるや不知）

六樹園家集に「ある年新宿のあたりに家居つくりて住けるに道遠ければとて孟蘭盆になりても棚経よむつる僧の来らさりければよみて遣しける

山里の盆は法師もとはざるをなき人いかで浄土より来る

文化文政以前新宿の辺に六樹園住所せしと見ゆ棚経の僧も道遠きを恐れて来らさりしと彼の寺は成等黒飛所三蔵寺中哲相院なれが内義新宿迄来るハ法獲るの時を費すゆえ来らさりしと見ゆ

同書に「文政三年あらたに草庵を靈岸寺につくりとなみて

たてそめし家居にうつる古翁あるじ顔こそあたはしら

六樹園石川雅望は文化の以ハ馬喰所に住し宿屋業を

猶有とさうそ「言外の姿乃おもひんまともまづかし」との歌
意をあらしなり姿の思はんのでるゝ以ろくまりかれてあれど
上の句はさこまでまゝ思はれぬ奇なり
同まゝ「里椿」
いとなみにひるは人形庭は姑つちのはなれぬ深草の里」
深草は燒物師の住する里ゆえ土と槌との同音を持て用ひし
同まゝ「月」
天の原月のお腋をなかむれば今宵ぞ秋のおなかなりける
こは拾遺和歌集巻三秋の部に原順の詠に「秋の面に
ある月なみを数れば今宵ぞ秋のも中なりけるとと
の古歌をとりし狂詠なり因にいふ今茅ゝに暑中といふあり
因形なれバ云ふことも無きか四角又は花形のをかゝえふ不當

管江の狂詠、就て其他の狂詠、就て

朱逸館家逸に「燒物の盃に酒をもれば自ら盃中に
星のかけうかむとて重寶にしける人のもとまて
一口は下戸ぞも千葉のすけよかし家の秘蔵の盃にまし」
思塗盃へ水をへれ七夕の影を写せバ盃ま浮ぶそれを呑むと
よしとて狂文ゆせしとさく同し里まて星かげ写ると見ゆ
同まゝ「谷風梶の物成草蔵前八幡の社内にて角力
興行の折い野川栄蔵にはしめて敗れたる時
手練せし手をとらひらがをのりやかつと車のわつといふ聲」
谷風梶之物初て負しと當時浮世ぶかりしを思はる
いまゝ「世の中しはふきゝみいたうにゆりけるにその頃世に
双ひなき角力に谷風梶ゆゑといふあり」この頃の風つよれ
ばとて皆人谷風とこければ

此古跡にて鶴司谷の河ぶれの辺ゆるかもうす尊ぬ
ごとく心覚て行し手ぐ
淡州横家島の中に奥州の姫の姫の中に
云大堂の龍頭は美女の面にして左右の
志賀のわたかまりたるをもて世の常の如く
に釣たりいかなる故にや
更るまで来まさぬ人を思しまの鐘に飽つく女ありか
かる鐘姫崎に在ると見へたりこれ所尊ねぬ
もの
朱雲管口ハ眞乳歡喜天に詣て
わに口をならせばまつち山彦にこたへてそらくるはしく
鰐口をたゝ狂ふせしハ心あるやもうず

長沙村の狐
あ子年

大堂の前に三四村の狐よりはかさきて御ふ時より月白明近の狐社
にて古風の種事ありなる所にはまらるから岩かとの面もを張て
すめよ夕飯を飲ませ新宿より馬車して月白姫へ帰りて人
力の風り所へ定其心にて祭りある狐社が沙辺あるとも
更に竹一物へ立ちてまれハ沙面の事にあるとも
ぬ元蔵人の道を数ゆるに出本業の所ハ園辺にある
のまてこれまでも無しのうやら狐ハつまれし話の如く
何れも無きぬ元月白面へ成り帰宅せんと学習院の
門面りを歩みしに路のうきに北郷美地氏宅をもらせ
し張紙あり芝のこと三田村鶴岡氏に聞き及ひ所れが
雪て帰らんと門を了ぬ事なせしに立ちられしハ主人姫が鶴
岡氏よりまられしとのことぬ元狐ハ姫を尊ねもれぬぬ元に
とうへハ同れる所にを待ちてまるとのことぬ元面るに三田

村々の者にも伝へられて為にその来るを待ち弥々到
らんことを希ひ待ち居たるが今もなほ七ツ過ぎに至りて始めて
三十人立ちて其の後に長崎村の神社へ行きて総代会合
せし事なりき世を立て居りし神事は社前の広き所
にて行ひ童子等と共に祭の儀式をなし酒等を出し
竹竿に幣束つけしを先きに持ち行く総代は胸に掛し
太鼓を打ち鳴らしの拍子にあはせて打ちつつ廻りの後に洞へ
参りて洞の前には男女ともに多くあり一同は合掌して
ねんごろに拝みて後は立ちて社の前にて三度黒となり其の
ありし後に帰りて立ち去りしが其後の雲の形に従ひて
見てなほもつまびらかにあらざるを気遣ひて[illegible]
一同と共に北村々の宿まで帰りしとぞ
右之を[illegible]して十時を過ぐるなりしと三田村談話聞

穢多非人

穢多は餌取の転訛との説もあれど元来は帰化人の子孫まで奴隷にされし者賤業者となりし者なりき

日本及日本人に喜田の説出たり其中に穢多の起りは帰化人説を是とする者の如し

陵戸　山陵守りたる者
官戸　官府の使役する者
家人　其主に隷属して一家をなさず其家の使役なり
公奴婢　官属の賤奴一戸をなさぬ者人身の如き者
私奴婢　私有の賤奴なり

後世長吏
(一)長吏の頭弾左衛門の配下に属せし者
関八州、下野日光領、喜連川領、及常陸の水戸領分(家)
以外の穢多非人は悉く弾左衛門の配下に属せしものなり

(二) 猿飼 弾左衛門の配下家康公の馬の病を療せし功により
雨来藏多非人以上の取扱ひを受け居たり

(三) 乞胸 江戸の所家業ハ非人の頭善七の支配にして在所支
配所にある者ハ弾左衛門配下なり

(四) 風ツト又所によりてシユクと訓む播州網干辺にあるの如
他は殆どなし 琴三味線胡弓なるを弾きハ歌を奇ひ
又芝居なとして近国を巡る女子は家にありて草履を
作り業として居る

(五) ささら こはいつになく乞胸の一族にして多く他方に
散居す

(六) 茶筌 備中当郡笠岡村にあり牢愛を業として
居たり

(七) 垣外 カイドと訓む京都悲田院村大阪天王寺村其外千日
鷲田篠田等に居れり皆一命に編入されて居る

(八) 船渡 水主渡守 こは信州水内郡市村越後名船郡
塩屋所海老江所等にあり何れも別構にして藏多非
人よりは遙か善き待遇を受け居れり

(九) 力者 田野山梨郡遠光寺村その他にあり代々小作農
業をして百姓と交らべ
此方によりて名称を異にするあり
出雲の八千ヤ肥後の調理坊越中のトウナイ京都
桂河畔の散所摂津の濱(シユク)餘戸(アマベ) 乾弾のゴザンビン等
又非人は犯罪者の子孫にして刑餘の人なり續後記に
橘逸勢の姓を改て伊豆に流せしあり姓非人を賜ふと

とあり[illegible]ハ少人を食はせ[illegible]下の老いて
ありし共古幼年の時に見しことありこもかぶりを食の器ひや
猪丁斗の堂住所に来りしに一人の男これハ乞食風体ハあらんに
[illegible]の事か[illegible]れ[illegible]ひしがやがて懐中より朱房つきたる十手
を取り出し乞食をおちゐ血をむせしを連れ[illegible]しとなしぬる法
[illegible]ハ[illegible]ましき[illegible]を起し今ハ泥[illegible]ハ[illegible]こは[illegible]
[illegible]の手代といふ者の由後ちて聞きたることありし又所家ハ[illegible]
月々[illegible]の手代に月極めの銭を与へると仕切の[illegible]
紙片を見世の口きの柱か枝へ張り置くことなりかくすれば日々
来る乞食この札を見て乞はずゆくことなり
[illegible]ハ[illegible]多には畢九二ツ無く一つと云ひし二方ハ四ツ指といふときく
静岡[illegible]家根屋の老婆はかく云ふ[illegible]人の指ハ水かきがつき居る[illegible]
[illegible]あひるの如しと信じ[illegible]に[illegible]かゝる迷信今となりて[illegible]
[illegible]

共古日録 畢九

目六十